第３回　長野県ICT学び推進協議会　議事録

R6.2.8
学びの改革支援課

1　日　時
令和６年２月８日（木）　13：30～15：00

2　実施方法
Web会議による

3　参加者
【信州大学】東原名誉教授、島田教授、佐藤准教授、両川公認心理士
【飯田市立遠山中学校】田中校長　【青木村青木中学校】箕田校長
【小川村立小川中学校】小林校長　【箕輪町町立箕輪西小学校】山本校長
【長野市立朝陽小学校】舞澤教諭　【佐久市立中込中学校】瀬下教諭
【長野市教育委員会】末松様　【佐久市教育委員会】菊池様
【上田市教育委員会】籔様・西原様　【松本市教育委員会】上兼様
【塩尻市教育委員会】島津様　【飯田市教育委員会】櫻田様
【小海町教育委員会】中島様　【箕輪町教育委員会】小林様
【喬木村教育委員会】長坂様　【小諸市教育委員会】小林様・竹内様
【駒ケ根市教育委員会】滝澤様　【安曇野市教育委員会】宮田様
【御代田町教育委員会】清水様　【長和町教育委員会】宮坂様
【南箕輪村教育委員会】本間様　【高森町教育委員会】北村様・伊藤様
【根羽村教育委員会】下井様　【木島平村教育委員会】芳川様
【信濃町教育委員会】北村様　【池田町教育委員会】塩川様
【辰野町教育委員会】木田様　【山ノ内町教育委員会】坂口様
【学びの改革支援課】臼井課長、細江係長、松坂指導主事、五味指導主事、加藤主事
【北信教育事務所】宮崎指導主事　【東信教育事務所】白井指導主事
【中信教育事務所】橋爪指導主事　【南信教育事務所】佐藤指導主事
【総合教育センター】岡宮専門主事、北原専門主事
【ＤＸ推進課】永野課長　【教育政策課】赤羽主事
【心の支援課】傳村指導主事　【特別支援教育課】大日向指導主事
【長野県市町村自治振興組合】木我様

4　内　容

（1）開会あいさつ

【臼井課長】

・令和 6 年度から 1 人 1 台端末の更新が始まる。これに伴い、県に 5 年間の基金を創設し、GIGA スクール構想で整備された端末の更新を計画的に進めていく予定。補助要件については、県全体で会議体を設置したうえでの共同調達が基本となっており、県教育委員会と市町村教育委員会が協力して進めていく内容が文部科学省から示されている。

・昨年 12 月の調査によれば、令和 6 年度の端末更新は、14 設置者が予定しており、4000 台強の端末が更新される見込み。端末の OS については、3 つの OS 全てに希望が寄せられたので、対応できるよう準備を進めているところ。

・令和 6 年 1 月 15 日には、市町村の希望を受けて端末更新の情報交換会を開催し、文部科学省初等中等教育局修学支援教材課の課長補佐から説明をいただいたところ。今後も必要に応じて文部科学省を招いた情報交換会を予定している。

・また、端末の利活用においては、今年度は「子供たち全員が問題発見・解決の過程でクラウドを活用できる」を目標に進めてきている。皆様の取組の成果もあり、一定の成果は得られていると認識しているが、今後は端末が日常に溶け込んでいくような状態を目指していくことが大事なのではないかと考えている。引き続き GIGA スクール構想の推進にご協力をお願いできればと思う。

・東原先生、佐藤先生、両川先生、また、センター長の島田先生、今年度もここまでお支えいただき感謝申し上げる。また、現場の先生方においては、各学校、各地でご尽力いただいており心より感謝申し上げる。

・本年度最後となる本協議会は、来年度に向けて、全市町村が参加できる形で開催している。来年度につながる会議となるようお願いできればと思う。

（2）担当からの説明

【五味指導主事】

＜令和 6 年度長野県GIGAスクール会議「Beyond」＜仮＞について＞

・県としても、1 人 1 台端末の更新に向けて、文部科学省から示されている補助要件等を満たすことができるよう準備を進めている。その 1 つとして、令和 6 年度から本会議を県域全ての教育委員会が参加可能な形にする。また、共同調達のワーキンググループを新設し、そこで話し合った内容について本会議で共有していく方針。

・本日も令和 6 年度に向けた準備として 25 を超える数の自治体から参加があり、今後も各市町村の皆様と連携して GIGA スクール構想を進めていきたいと考えている。

＜長野県GIGAスクール構想端末の更新市町村（学校組合）教育委員会対象情報交換会の報告＞

・端末の更新については、市町村教育委員会を対象に情報交換会を行った。文部科学省の課長補佐も参加し、85 名の自治体の皆様に参加いただいた。

・端末の整備、更新には適切な処分も含まれる。県教育委員会では県立中学校と情報交換を行い、端末の適切な処分に関するチェックリストの作成を進めているところ。完成したところで、メールや県のホームページで通知する予定。市町村教育委員会の皆様には、ぜひ参考にしていただきたい。

＜「GIGAスクール構想の下での校務DX化チェックリスト」に基づく自己点検結果の報告について＞

・全ての教育委員会、学校からご提出いただいた。本日お示しするのは 12 月末に出された速報値。全国の結果と長野県の数値を比較すると、児童生徒、教職員のアンケートでの活用やクラウド上での共有、会議のペーパーレス化など、活用が進んでいることが分かる。県としては、さらなる活用が進むよう支援を継続していきたいと考えている。

・一方で、課題も見えてきた。学校現場での端末の持ち帰りや、設置者が行う研修でのクラウドの活用については、やや弱い傾向。

・今後、文部科学省から確定値が示されたところで、その結果を生かして今後の事業での活用を含めて検討を進めていきたいと考えている。

＜令和６年度 リーディング DX スクール事業の報告＞

・今年度、リーディング DX 校として須坂市立東中学校、小川村立小川中学校、箕輪町の小中学校で実践を重ねている。東中学校では、単元内自由進度学習の中でクラウドを活用した授業を行った。小川中学校では、クラウドを活用して生徒の個々の追求を支援する授業を行い、校務でも活用を進めている。箕輪町の取り組みでは、児童生徒が主体的に学習を進める授業実践を研究し、クラウドを活用した授業改善を進めている。

・リーディング DX 校の実践は、文部科学省のリーディング DX のホームページで資料が閲覧できるほか、各指定校で作成したマルチアングル動画を県のホームページで公開する予定。

＜GIGA スクール運営支援センター事業について＞

本協議会終了後、少し休憩を挟んでこの Zoom 内で行うので、退出せずに参加していただくようお願いしたい。

（３）協議（司会：島田教授）

１）GIGA スクール構想の実現に向けた最新情報

【東原名誉教授】

１人１台端末の更新に向けて、３点お伝えしたい。

＜端末利活用状況の振り返りについて＞

・この度の端末更新をきっかけに、自治体や学校が端末活用状況について振り返り、何らかの対策をしていく必要があるのではないかということが、文部科学省の調査結果等から見受けられる。

・全国的には、端末を単に活用する段階から、授業そのものがより良くなるよう活用する段階に確実に移行している。学校の授業が端末によるものになればなるほど、授業がこれからの時代を生きる子どもにとって必要な力を育てることに役に立っているかどうか、という視点で振り返ることが非常に重要。端末を使うか使わないかを超えて、端末が授業で本当に上手く使われていて、子どもたちが伸ばすべき力を伸ばせているかということに注目していくべき、という動向になってきている。

＜文部科学省「学校 DX 戦略アドバイザー事業」の活用について＞

・端末更新に関しては県が大きな仕組みを作ってくれるのでそれに乗っていくことが基本だが、細かいところで自治体ごとに困りごとがあろうかと思う。そんな時、自治体のちょっとした質問にも答えてくれる文部科学省の仕組みがある。「学校 DX 戦略アドバイザー事業」といい、オンライン又

は現地でその地域の悩みごとを聞き、アドバイスをしてくれるもの。

・アドバイザーには学校の教員経験者や教育委員会の方もいれば、民間企業の方もいる。色々な所属の方がアドバイザーになっており、指名をすることも可能だし、適切な人の選定をお願いすることも可能。

・端末更新に向けて迷うことがあれば、ぜひ文部科学省のアドバイザー事業を活用していただきたい。

＜学校や自治体間での情報共有について＞

・前回までの会議では各参加者から上手くいっていることの発表があったが、次につないでいくためには、困っていることの情報共有も非常に重要。実はこんなことで困っている、ということをお話いただければ、次に発表する方が上手く答えてくれるかもしれないし、この後の GIGA スクール運営支援センターの情報交換会でいい知恵をもらえるかもしれない。

・この度、文部科学省が考えている端末更新が都道府県を中心とした共同調達を原則としていることには、県域で高め合えるように、という意味合いも含んでいるので、参考にしていただければと思う。

２）市町村（学校組合）教育委員会や現場の先生方より GIGA スクール構想の実現に向けた本年度取組の成果の共有

【飯田市立遠山中・田中校長】

・本校では、日常的なクラウドの活用がこの 1 年で進んだ印象。生徒会や部活動、宿泊行事などで Classroom が活用され、生徒同士や教師との日常的なやり取りも活発に行われている。授業でも全職員が活用し、ベテランの美術や家庭科の非常勤講師も積極的に活用している。

・また、東中学校に ICT の視察研修に行き、本校でも自由進度学習や協働的な学びの推進に取り組んでいる。

・4 月からの校務支援システムの導入に伴い、C4th と Classroom の使い分けについて課題を感じている。

【青木村立青木中・箕田校長】

・夏休みに 2 学期の方向性を決める研修を行い、その後 10 月に春日井市立高森台中学校に全職員で授業参観に行った。完全に生徒のペースに任せている授業の在り方を目の当たりにし、先生方が自分の授業を振り返るきっかけになった。

・10 月から 12 月にかけて本校でも探究の時間を設けた。全校生徒が Chromebook を使用して「誰かが喜ぶモノやサービスを作る」をテーマに取り組み、Jam board や Google Chat を使ってその場で共有しながら授業を進めることができた。生徒が出した答えに基づき、さらに探究につなげていく取り組みを行いたいと思う。

【箕輪町立箕輪西小・山本校長】

・箕輪町では、町内の小中学校が連携して情報を共有し、同じ方向に向かって ICT を推進できていることがありがたい。町内の小中学校が年 3 回授業を公開し、主体的に学ぶ授業の在り方に

ついて学び合うことができた。
・子どもに学びを自己決定させることに不安を感じることから端末の利用に消極的な先生方もいるが、それを課題として取り組んでいきたいと思う。

【長野市立朝陽小・舞澤教諭】
・職員研修に関して、今年度は著作権研修やデジタル教科書の体験研修を行った。デジタル教科書に関しては、ネットワークの状況についての不安の声も聞かれた。
・今年度のまとめとしては、研究主任の授業を参観し、その授業を個別最適な場面、協働的な学びをしている場面、ICT の有効活用をしている場面にまとめることができた。来年度は従来型の学習スタイルと ICT のミックスというところを研究していきたい。
・児童の端末活用については、児童総会に関してオールタブレットでの議案書作成や児童会役員間での Teams の活用を行った。しかし、自由奔放に端末を使う子どももおり、それに対する保護者の不安など課題もある。これらの課題についても今後情報共有していければと思う。

【佐久市立中込中・瀬下教諭】
・生徒の端末の持ち帰りがまだ進んでいない状況がある。本校自体の活用の不十分さに加え、夕方になると段階的に端末にロックがかかってしまい結局学習に使えないという問題があり、各自治体がどのように制限をかけているか教えて欲しい。
・端末の活用について紹介する。私の技術の授業では、Google を活用してスライドを作成しているが、リアルタイムで更新できる利便性を実感している。例えば生徒にポートフォリオと銘打ってスライドを作成させ、設計図や制作の記録を残して学びのプロセスを見える化した。また、Google スライドの共有とコメント機能の活用は、生徒同士のコラボレーションを促進する。

【長野市教委・末松指導主事】
・長野市では、授業での Microsoft の Teams や Google Classroom、ミライシードなどのソフトの活用が進んでいる。１つの授業で２つのソフトを場面により使い分けたりする姿が見られるようになってきた。
・各学校での研修内容が充実し、校務に応じた使い方を学ぶ機会が増えてきたところも大きな進歩と感じている。
・校務のデジタル化も進み、校長会でも iPad や SharePoint の活用が増えている。持ち帰りの課題や教師間の活用力の差異にも対応する必要がある。

【佐久市教委・菊池指導主事】
・今年度、GIGA スクール構想において、普通教室と特別支援教室に約 280 台の電子黒板を国の補助金を活用して整備した。これにより、GIGA スクール構想に求められた環境整備が達成されたと考えている。電子黒板には ChromeOS が搭載され、教師や生徒が自身のアカウントでログインして利用できるようになっている。この導入により、先生方が Chromebook と連携した授業作りに積極的に取り組んでいる。

・ただし、運用に関してはガイドラインの必要性が明確になった。特に、端末の利用に関するルールやセキュリティ面での対応が必要。今後はシステム会社等との定期的な会議を通じて、課題の解決に取り組んでいく。
・また、導入した Classroom が管理されず放置されているケースが発生しており、これに対する対応策も必要。

【上田市教委・籔指導主事】
・上田市では、Chromebook の活用を促進するために、中学校でのオンライン公開授業や小学校での公開授業に合わせたクラウド研修を実施した。小規模ながら内容の濃い研修が行われた。
・さらに、先生方へのアンケート調査により端末の活用状況について把握したが、活用状況の二極化が明確になっている。来年度は、さらなる ICT の活用を目指し、自動採点システムの導入や各学校への支援を進めていく予定。

【松本市教委・上兼指導主事】
・当市では 3 つの取り組みを行っている。1 つ目は、各校 1 名で構成された約 50 名の委員会を設置している。そのうちの 1 回は、授業改善を主軸とした子供の資質・能力の育成を図るための委員会である。2 回目の委員会では、国や県、ICT 推進センターの目標を共有し、グループごとに授業を公開したり、参観授業を行ったりしている。そして、もう 1 回の委員会は、ハード面に加えて各校の取り組みや課題を共有し、情報交換を行っている。
・2 つ目の取り組みとして、今年度より松本市教員研修センターで、情報モラルやデジタルシティズンシップ教育、端末活用、プログラミング教育や探究に関する研修を行っている。これに加えて、学校訪問型の ICT 研修も実施している。また、単元内自由進度学習や探究的な学びを推進する中で、ICT や端末を活用した授業作りも検討されている。
・最後に、ICT 支援員と連携して各校で実践された授業や授業作りで活用できるサイトがまとめられ、教師用の端末で見ることができる環境を整えている。
・これらの取り組みにより、ICT 教育やクラウドの活用が前向きに進み始め、授業の中でも ICT を取り入れる学校が増えてきていると感じている。学校によっては、児童や生徒が ICT に関わる委員会を開設し、活用のルールや管理を主体的に行うところも増えている。
・他の市町村と同じように活用の頻度で課題が生じている。このため、まずは各校の実態を把握し、来年度からは再度端末の活用推進について検討していきたいと考えている。

【塩尻市教委・島津指導主事】
・今年度、タブレットの文房具化と授業での活用がかなり進んだ印象。1、2 学期には各校で ICT 活用週間を推進する取り組みとして、授業参観や支援職員研修、個別相談や情報モラルに関わる授業を実施。そこでの実践事例を塩尻市の GIGA サイトに投稿しながら情報発信をしてきた。
・3 学期には市内 14 校に対して各校 2 日間程度学校訪問、授業参観をしている。効果的に ICT 活用している先生方の授業等の事例を、Google Chat 等を使ってリアルタイムに情報発信する取り組みを始めている。

・課題としては、学校間や教員間の活用状況に差があり、4 月からは各学校でのサポートや研修を実施している。家庭での活用や持ち帰りにも課題があり、これに対応するための準備を進めている。授業改善に本当につながっているか、という課題もあり、来年度は子どもの力を伸ばすための授業改善を進めていく。

【飯田市教委・櫻田指導主事】

・飯田市では、校務の情報化に関する取り組みを行っている。文部科学省から調査のあった校務 DX 化チェックリストの内容を分かりやすくグラフ化し、各校に展開している。また、スプレッドシートを活用し、DX 化が進んでいる学校順に並べ情報共有を行っている。いい事例については、研修の中で紹介し、各校からの質問にも応じている。

・また、活用状況や指導力チェックに関しては年に 1 回アンケートを実施し、Looker Studio を使用して情報を共有している。

・端末の持ち帰りについてはクラウド上で申請をしてもらう形式にしている。クラスで何人がどんな内容で持ち帰っているか、把握できるようになっている。

・また、教科の専門性を高める取組も進めようということで、英語科から始めている。デジタル教科書を使いながら音読の力を高めるため、Reading Progress やイマーシブリーダーというサービスを Chromebook で使えるようにしている。子どもたちが自分で学び方を選びながら練習していくことが、子どもたちにどんな影響を与えるのか、今後紹介していきたいと考えている。

・GIGA スクール運営支援センターについては、来年度、下伊那 14 市町村をつないだものを作れたらと思っている。現在、各自治体の状況を共有するほか、年 2 回の情報担当者の情報交換会を実施しているところ。飯田市、喬木村、信州大学東原先生による週 1 回のオンライン情報交換会も実施しているが、そこには他の町村にも間口を広げている。

・自治体間で使用している OS が異なり Google Chat を活用した情報交換や交流が思うように進まないことや、紙ベースによる高校入試と乖離が生じるのではないかという不安から、中学校での端末活用や CBT 化が進まないことが課題。

【小海町教委・中島教育長】

・小学校では、学年間の差はあるが、指導者用の電子教科書と電子黒板を利用した学習形態が中心的。 1 人 1 台端末の利活用はこれからといった印象。

・一方、中学校では、グループ学習の形態が取れる教科を中心に、1 人 1 台端末を利用しての学習が深まっている。また、Teams を利用した同時共同編集も多く行われている。中学校からの要望もあり、放課後や家庭学習での端末の利用機会を多くする目的で、AI 型の学習教材の導入が予定されている。

・端末の更新に関しては、共同調達が原則であるが、端末導入の際に近隣町村で機種を揃えた経緯があるため、周辺の町村との連携が必要と考えている。

【箕輪町教委・小林教育長】

・Chromebook を活用しながら協働学習が進められている。研修で東中学校の取組を実際に見たことにより、自由進度学習も取り入れながら授業の質の改善が進んできた。

・町の教育 DX センターを作った。支援員やエンジニアが各学校を回り、きめ細かな対応ができるようにしていきたいと思っている。
・端末の持ち帰りが課題。家庭での学習に必要感のないものをただ持ち帰らせても思うように活用が進まないため、今後課題意識をもって取り組んでいきたい。

【喬木村教委・長坂補佐】
・喬木村は、リーディング DX スクールの指定を受けており、スプレッドシートを活用して対話的な学びを充実させている。それを発展させて Jam board による考えの構造化に取り組むことで、授業の質の向上につながっていると実感している。
・端末の持ち帰りという点で言うと、考えの構造化というところまで授業の中でやっていくと時間がかかってしまうので、この部分は家庭学習でやっていきましょう、というふうに自然に授業とつながる端末活用を推進すると、必要感をもった端末の持ち帰りにつながると考える。
・また、職員会議をフルクラウド化しペーパーレス化に取り組んだり、中学校では Google カレンダーを活用して職員の動向や連絡事項を統一的に管理できるようにしたりして、校務の効率化に取り組んでいる。

3）充実した利活用に向けた取組
信州大学教育学部附属次世代型学び研究開発センター
＜全国のクラウド活用の先進的な取組について＞
【佐藤准教授】
・この 1 か月の中でいくつかの学校に行って、その中でもいいなと思う事例をいくつか紹介していく。まず初めに、長野市立信更小学校の 3 年生の国語の授業。何が良かったかというと、1 時間でここまで物語を書けるということ。これを子どもたちそれぞれが 1 人でやっているということ。自分でやっていくということを迷いなくやっていたところが、非常に印象的な実践だった。
・次に、附属松本小学校の 6 年生の社会科の授業。先生が授業の中で、子どもの教科書からの情報の取り出しについて解説をしているところから授業がスタートしている。今までは、先生が教科書の何ページだというふうに指示していたわけだが、今は子どもが自分で学ぶということをやっている。そうなってきた時に、まずは信頼性のある情報が担保されている教科書をきちんと読むというところからやっていこうという、そういった取り組み。
・それから港区の白金小学校の 4 年生の社会科を見てきた。昨年 9 月から実践に取り組み始めた学校だが、ほとんどのクラスが、子どもが自ら学ぶ、自ら選択するというところにシフトしていた。こんなに早く変わっていくのかというところに驚いた。ここの先生は、「ただ、子どもたちにどう委ねていくのか、任せていくのか、選択させていくのかというところの工夫ぐらいだろう」と、「だから、自分の仕事はあまり変わってない気がする。けれども子どもたちは、自分たちで学ぶ姿が見られているし、僕はこの方がいいというふうに言っている子どもが非常に増えた」というふうに言っていた。
・こちらは静岡県吉田町。リーディング DX スクールに指定されている。探究のサイクルで授業が進んでいるということが 1 つ目。それから、板書が、先生がまとめた内容ではなくて、プロセス、方

法が書かれているというところに着目してほしい。子供たちが自分で情報収集し、整理し、まとめるということをやっていくと、子どもたちの端末が、これまで先生がまとめていた板書のようになっていく。今までのスタイルだと、どちらかというと先生が頭をフル回転していていたというふうによく言われるが、こういうふうに、どのようにプロセスを踏んで学びに向かっていくのか、問題を解決していくのかということがきちんと示されているというところが非常によいなと思った。

・それから、探究的な学習でやると、例えば、情報の収集、整理、分析、まとめ、表現と書かれているので、情報活用能力を非常に意識しやすい。情報の収集はどうしていくのか、そこで必要なことは何なのか。そして、気をつけるべきことは何なのかというふうに分解していくと、それは、子どもたちの情報活用能力になっていく。問題解決のプロセスでやっていくということと、プロセスの中で何が必要なのかということを分解して考えていくと、情報活用能力が身に付きやすくなる。

・こちらは埼玉県久喜市の中学校で、リーディング DX スクールに指定されている。中学校 2 年生の国語だが、学習の手引き、ラーニングガイドと言われるものを最初に示して、子どもたち 1 人 1 人のペースやタイミングに委ねていくというようなパターン。こういった情報は今まで板書していたが、この板書はクラウドに行って、そしてそのクラウドを見て、子どもたちが事前に確認をしたり、授業中にこれを見返したりしながら、1 人 1 人のペースでやっていく形になっている。

特別支援教育課＜現状の取組について＞

【大日向指導主事】

・令和 5 年度 ICT インクルーシブ教育推進部会では、特別な支援を必要とする児童生徒がクラウドの活用により持てる力を最大限に発揮できること、そして合理的配慮としての ICT 活用により、特別な支援を必要とする児童生徒が集団の授業場面で自ら学習に取り組むことができることの 2 点を狙いとして、部員の実践発表から部員同士が学ぶこと、部員の実践を広く周知することを目指した。

・今年度は部会が立ち上がり 3 年目の節目でもあるため、部会立ち上がり当初に策定したインクルーシブ教育推進部会の理念に立ち返り、協議を進めることも留意した。部会は 10 月から 4 回開催し、両川先生をはじめ、有識者の先生方から ICT 活用に関わる最新の動向を基にした助言や、インクルーシブ教育の視点からの助言をいただくことができた。

・今年度の部会では、通常の学級と特別支援学級・通級指導教室での ICT 活用の実践が報告された。通常の学級では、中学校の例では Padlet を活用し、自分に合った表現方法を選択できることが有効であり、特別支援学級在籍の生徒や不登校の生徒も級友とともに学ぶ実践となった。

・中学校の別の例では、スクールタクトを活用し、自分の考えをテキスト入力で発信できた。スクールタクトは教師が生徒の学習の進捗状況を把握し、即時に個別の支援ができるという効果があった。

・通級指導教室では、書くことに困難を示す生徒への支援を研究した。在籍学級の授業を Google Meet でつなぎ、通級指導教室で在籍学級の授業を受ける場面を設定し、通級の担当者が寄り添って様々なアプリを試しながら、その生徒に合ったノートテイキングの方法を検討することができた。

・小学校の特別支援学級では、在籍学級の Google Classroom に特別支援学級担任も入ることで、在

籍学級での学習内容を把握し、同じ内容の学習を特別支援学級で必要な支援をしながら行うことができた。これにより子どもたちは在籍学級とのつながりを感じることができた。

・今年度のまとめは２つの方向で考えている。まず、部員の実践を指導案の形にして、部員以外の先生方にも活用していただけるように準備をすること。それから、今年度は部会での取り組みをICTインクルーシブ教育実践報告会という形で全県の小中学校、特別支援学校の先生方、教育委員会の先生方に紹介する。

【両川公認心理士】

・不登校の子どもは、もれなく端末の持ち帰りができ、意思があれば授業を観ることもできるが、Google Classroom などのグループウェアを使っていない場合は、不登校の子は見ても参加できない。

・いまだに通級指導教室や特別支援学級では端末の使い方、共同、というのが理解できておらず、1台の端末を回しながら皆で入力したりとか、先生と生徒が１台の端末を共有したりしているのを見て愕然とした。

・今日は素晴らしい取組の発表がたくさんあったが、同時に不登校や支援学級の子どもたちはどうしているのかということを考えていただき、どんな教育がそこまで届いているのかということを確認していただければ幸いである。

４）今回のまとめ

【島田教授】

・今回共有いただいた困りごと等については、Zoom のチャットでも解決策が提案されていることがある。もし必要であれば、県教育委員会の方に言っていただければ、共有できる。

（３）閉会あいさつ

【細江義務教育指導係長】

・端末が導入された初期には端末の更新やトラブル対応などに関して心配される声もあったが、今後は国や県、市町村、学校として本気で取り組まなければならない状況。

・端末の利活用等について「二極化」という言葉が今日も聞かれたが、二極化を解消するためには、端末を活用することに関するメリットやデメリットを丁寧に周知し、理解してもらうしかない。

・今日の情報交換では多くのヒントを得ることができたうえ、この協議会が今後も重要な役割を果たしていくことを確信した。